

荒川 瑞穂（あらかわ みづほ）  
文部科学省大臣官房人事課専門職（令和5年6月現在）

【派遣データ】

派遣元省庁：文部科学省  
派遣先機関：UNESCO（国連教育科学文化機関）  
派遣先での役職：Junior Professional Officer, P2  
派遣期間：2015年6月～2018年9月  
派遣時の最終学位：学士（文学）

【略歴】

2012年（平成24年）4月、文部科学省入省。入省前に、人材育成分野の民間企業で3年4か月勤務。文部科学省入省後、文化（記念物・世界遺産）、科学技術（量子放射線研究）、教育（教科書・外国語教育）、国際（国際統括官付）の各分野を経験したのち、2015年から、UNESCO教育局 ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）課に派遣。UNESCOでは、日本政府からの信託基金の管理と、国際会議・ESD賞関連の準備を行った。帰国後、第一子の育児休業取得、初等中等教育局教育課程課への勤務、内閣官房内閣人事局への出向を経て、現在は第二子の育児休業取得中。

○ UNESCOに派遣されることになった経緯について、教えてください。

大学ではフランス文学を専攻しており、入省以前から語学力を活かせる国際関係の仕事に興味がありました。官庁訪問・入省の際にも海外勤務について強い希望を伝えていましたが、当時は若手職員向けの国際機関のポストはなく、まずは人事院留学に応募しようと思って勉強していました。入省3年目の半ばに、「将来、国際機関の幹部として活躍できる職員を早くから育成するため、新たに若手の派遣を検討しているが希望するか」と打診がありました。その際は、留学か派遣のどちらを希望するかと聞かれましたが、修士号は自力でも何とかかなると思い、是非とも国際機関に出向したいと熱意を伝えました。その後、フランスに本部をおくUNESCOへの派遣が決まった際には、学生時代からの夢が叶って涙が出るほど感激しました。

○ 選考プロセスについて、教えてください。

省内では、人事課のほかに国際統括官付の面談があり、国際機関での勤務の適性の確認が行われ、その後、UNESCOに提出する応募書類を準備しました。自分の仕事を英語で端的に説明することが難しく、抽象的な内容になりがちでしたが、国際統括官付が丁寧に添削してくれ、非常に助かりました。その他の書類の提出や筆記試験はありませんでした。

応募書類の提出後、UNESCOの人事課と派遣先部署と3者で電話面接がありました。質問された内容は、いわゆるコンピテンシー・ベースド・インタビューで、「これまで仕事でどのような困難を乗り越えたか」、「同僚と衝突した際はどのように解決するか」といった質問に英語で答えました。

当時は、英語よりもフランス語の方が得意だったため、派遣の打診があってからほぼ毎日オンライン英会話の授業を受けました。模擬面接や、不意の質問に対して自分の考えをまとめる練習をしていました。

派遣後、UNESCOの人事課から、勤務にあたって「民間企業での勤務経験を高く評価した。知見を生かして勤務してほしい」と話がありました。また、派遣先部署の課長から「英語については苦勞するかもしれないが、フランス語で適宜補ってもらって構わない」とも言われました。面接に向けて努力したものの、のちに英語力不足を痛感することになりました。

## ○ 着任に当たり苦勞した点について、教えてください。

留学や海外生活の経験が全くない中で着任すると、いくら TOEIC や TOEFL で点が取れていても、言語面で非常に苦勞するものだと実感しました。UNESCO は、部署によって英語・フランス語が（時には両方が）使われており、私の派遣部署は英語が公用語でした。情けない話ですが、勤務当初は話についていけず、ミーティングが終わってから同僚にフランス語で内容を確認したり、外部へのメールを送信する際は上司に英文を確認してもらったりしていました。英語もフランス語もネイティブのように流暢に操り、プロジェクトをリードしていく同僚たちを横目に、自分の思ったことすら正確に伝えられない自分に劣等感を感じる毎日でした。

1日でも早くキャッチアップできるように、Speexx を利用したり、UNESCO の英語上級クラスを取ったり、若手職員のランチ会やピクニックに参加したり、そして何より、どんな会議でも必ず発言すると決めて日々を過ごしました。幸い、職場の同僚は暖かくサポートしてくれました。日を追うにつれ、弱みだった語学に成長を感じるとともに、もともとの強みを生かした仕事ができるようになっていきました。たとえば、日本の制度に関する知識、日本政府との調整能力は無比のものであり、課題の分析や解決策の提案、関係部署と協力して期日までにプロジェクトを進めることも、日本の行政官の得意分野だと感じました。また、細かいことですが、Word、Excel、PowerPoint、会計ソフト（FABS）などの事務処理能力でも、一目置かれていたと思います。離任する頃には、努力の甲斐あって、フランス語より英語の方が得意と思うほどになりました（正確には、英語は仕事用、フランス語は生活用に特化していきました）。

日本の行政官が外国語で完璧を目指しても、残念ながら限界があります。実務に当たっては、文法や表現、発音が多少おかしくても、何をしてほしいのか、何が問題かを相手に明確に伝えていくことで、きちんと仕事を進めていくことができるとわかりました。まずは海に飛び込んで、必死にもがいているうちに、泳ぎ方が身についてくると思います。

## ○ UNESCO の仕事の特徴や、担当した業務の内容について、教えてください。

UNESCO は名前のお通り、教育・科学・文化、そしてコミュニケーションを所管しています。私はそのうちの教育局で、ESD を担当していました。ESD は、2002 年の国際会議で日本が提唱した考え方で、我が国が継続して支援してきた分野です。私が勤務していた 2015～2018 年は、ちょうど「グローバル・アクション・プログラム（GAP）」（2015-2019 年）の真ん中であると同時に、2015 年に採択された「持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」との関係を整理する、エキサイティングなタイミングでした。赴任直後に SDGs 採択のニュースをみんなで聞き、周囲の職員が期待感に沸き立っていたことも印象に残っています。

私の担当は、日本政府からの信託基金（JFIT）の割当・支出管理、JFIT 配下のプロジェクトの進捗管理・サポート、ESD 賞の審査会・表彰式の実施、約 80 団体が参加するキー・パートナー・ネットワークの運営事務などを行っていました。UNESCO の仕事は担当者個人で完結することが多いのですが、ESD 課の業務はほとんど JFIT 関連だったため、全体を俯瞰し各担当者と広く関わることができて恵まれていました。

やりがいを感じた業務の一つは、ESD 賞の表彰式の準備・当日の運営です。会議室を取ったり通訳を手配したりといったロジの部分では、フランス語を使う機会が多くありました。また、日本の信託基金で運営されていることを印象づけられるよう、日本政府のレセプションを同日に開催してもらったり、授賞式では私自身も着物を着てステージに上がり、文部科学大臣・UNESCO 事務局長に表彰状と記念品を渡したりといった工夫をしました。

また、キー・パートナー・ネットワークのために、ウェビナーシリーズを企画したのも楽しい仕事でした。ネットワークには国連の他機関や、NGO、各国政府、教育機関など、世界中から様々なアクターが参加していて、開催時間を決める時は時差に配慮していました。毎回テーマを決めてESDの取組をシェアしてもらいました。本当はモデレーターの役目を担いたかったのですが、議論をまとめる自信がなく、結局離任するまで務めることができませんでした。今後、やってみたい仕事の一つです。

○ 派遣を通じて得たことや、派遣経験を今後どのように活かしていきたいかについて、教えてください。

英語力に関するコンプレックスについて前述しましたが、所管分野についての専門性についても、引け目を感じるが多々ありました。UNESCOの教育局では、ジェネラリストではなくスペシャリストが採用されています。ポストへの公募の際は、関連分野の学位（修士号以上）が求められますし、職務経験も関連している必要があります。実際に働いてみて、今後の方向性や、出版物・国際会議の構成を議論する際に、理論的な枠組みを知っておきたいと思い、英国の大学院でパートタイムの修士号を取得することにしました。その後妊娠・出産のために、勉強は帰国後に続けることになりましたが、派遣を通じて学びたいと思えた分野で修士号を取得できたのは大きな収穫でした。その後、一緒に仕事をしたキー・パートナー・ネットワークの有識者と国際学会で再会した時には、感激もひとしおでした。

また、国際機関の存在意義を肌で感じることも大きかったです。日本からの訪問者を迎える際に、よく「UNESCOは日本の一地方大学の運営費交付金と同じくらいの予算で運営されています」と話して驚かされていました。知名度に比べて限られた資源にもかかわらず、国際的にインパクトのある政策を実施する工夫に、学ぶところがあると感じました。特に、ホットな分野の議論をリードし、新しい価値を提唱していく場面では、知見を利用するとともに、日本から発信するチャンスを見つけたいと思いました。

国内業務においても、派遣経験者ならではの国際感覚が磨かれたように感じています。業務で目にする「持続可能性」、「多様性」、「ジェンダー」といった言葉のもつニュアンスがより鮮明になり、子供たちが向き合う「グローバルな社会」が具体的に想像できるようになりました。

今後は、日本政府と国際機関とを往還するようなキャリアを歩むのが理想です。また派遣の機会がめぐってくる時のために、語学力を磨き、専門性を深めつつ、国内業務にしっかり取り組んでいきたいと思っています。

○ 将来的に国際機関への派遣を希望する職員へのメッセージをお願いします。

様々な国籍、人種、宗教、ジェンダーの同僚が、同じ目標に向かって協力しあう国際機関での日々は、私にとって希望に満ちた感動的な時間でした。派遣先の機関がどこであれ、国際機関での勤務は、何物にも代えがたい経験になると思います。

若手職員の方に派遣の打診があった際は、ぜひチャンスをつかんでほしいです。若手だからこそ、同世代の若者がどのようなことを考え、行動しているか、より鮮明に感じることができると思います。UNESCO の 20~30 代は、各国政府から派遣されている JPO、正規職員として雇用が保障されている YPP、期限付き雇用のコンサルタント・エキスパート、無給のインターン・ボランティアと多様です。業務で関わりのある相手にも、NPO 代表、若手起業家、気鋭の研究者、インフルエンサーなど、パワフルな若者がたくさんいます。若者同士フラットな人間関係を築くことができる利点を活かし、ぜひ視野と人間関係を広げてもらいたいと思います。

仕事はもちろん、プライベートで受けるたくさんの刺激が、人生の財産になります。素晴らしい経験を楽しんでください！